

2026（令和8）年8月25日

【共同プレスリリース】

国文学研究資料館が世田谷文学館所蔵「宇野千代自筆資料」のデジタル画像公開
代表作『おはん』や『薄墨の桜』など
戦後から現代の文学・文化を照らし出す資料群

発表のポイント

国文学研究資料館（以下「国文研」）は、2025年より世田谷文学館（東京都世田谷区）が所蔵する宇野千代自筆資料33点（計1,673枚）の高精細デジタル化に取り組み、2026年8月25日に国文研の「国書データベース」にて公開しました。今秋スタートの、宇野千代をモデルとしたNHK連続テレビ小説『ブラッサム』の放送を控え、関心が高まるタイミングでの資料公開です。

今回の公開は両館の協力による宇野千代資料公開の第一弾であり、今後も継続して公開を続けます。（画像一覧 <https://kokusho.nijl.ac.jp/page/list-SEBU-unochiyo.html>）

国書データベース <https://kokusho.nijl.ac.jp/>

国文学研究資料館が構築するもので、国内外の多くの機関等及び国文学研究資料館が所蔵する資料の書誌情報と、その一部の高精細画像を一度に検索・利用できるデータベースです。無料で公開していますので、どなたでも利用できます。

発表内容

宇野千代（1897～1996）〔図1〕は山口県に生まれました。朝鮮、京都、東京そして札幌を転々とし、新聞懸賞小説に応募した『脂粉の顔』、時代の雑誌「中央公論」に送った『墓を^{あば}く』でデビューします。以後、『色ざんげ』『おはん』『水西書院の娘』『刺す』など、結婚や恋愛の機微を描いた傑作を残しました。さらにベストセラーとなった『生きて行く私』をはじめとする随筆、起業した出版社「スタイル社」「文体社」での編集者・経営者としての活動、また「宇野千代きもの研究所」でのデザイナー活動など、昭和期には多彩な文化活動でも知られました。淡彩の、それでいて心理と文化の深みにもぐりこむような宇野千代の文体は、今日なお多くの作家・読者に愛されています。



〔図1〕宇野千代（昭和7年頃）

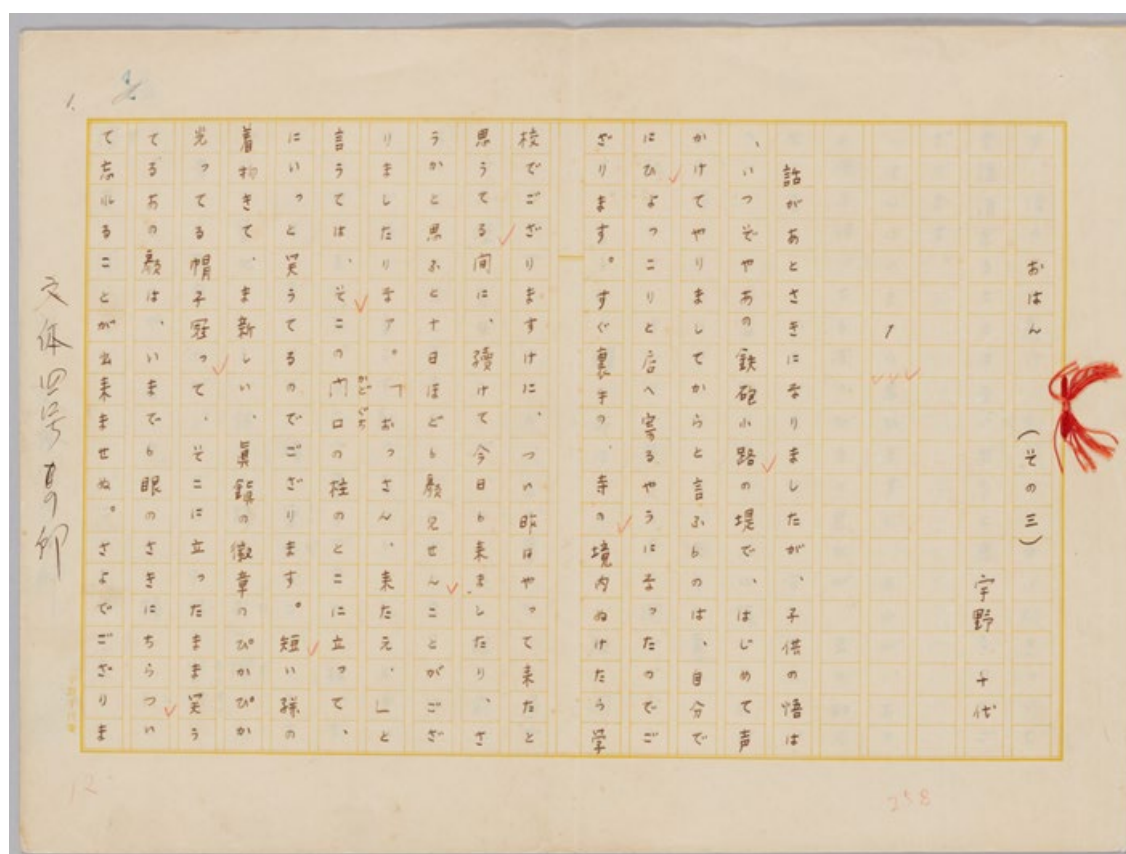
宇野千代の原稿は、2023年度に株式会社宇野千代の藤江桂子氏より世田谷文学館が寄贈を受けたものです。原稿の他、直筆資料や遺愛品など2,000点以上の宇野千代関連資料があわせて収蔵されました。

大正時代から現代にかけて幅広い領域で活動した宇野千代の文学は、日本における家族、性、ヴィジュアル・イメージ、高齢化社会について考えるための貴重な資料です。世田谷文学館と国文研との協力・連携のもと進めたデジタル化の取り組みにより、宇野千代の自筆資料のインターネットを通じた検索・閲覧が「いつでも、どこでも、どなたでも、そして無料で」可能になりました。今年9月からは、宇野千代をモデルにしたNHK連続テレビ小説『ブラッサム』が放送開始予定です。宇野千代の創作現場を眺めながら、戦後文化、現代文化について思いをめぐらせていただければ幸いです。

■デジタル公開の意義

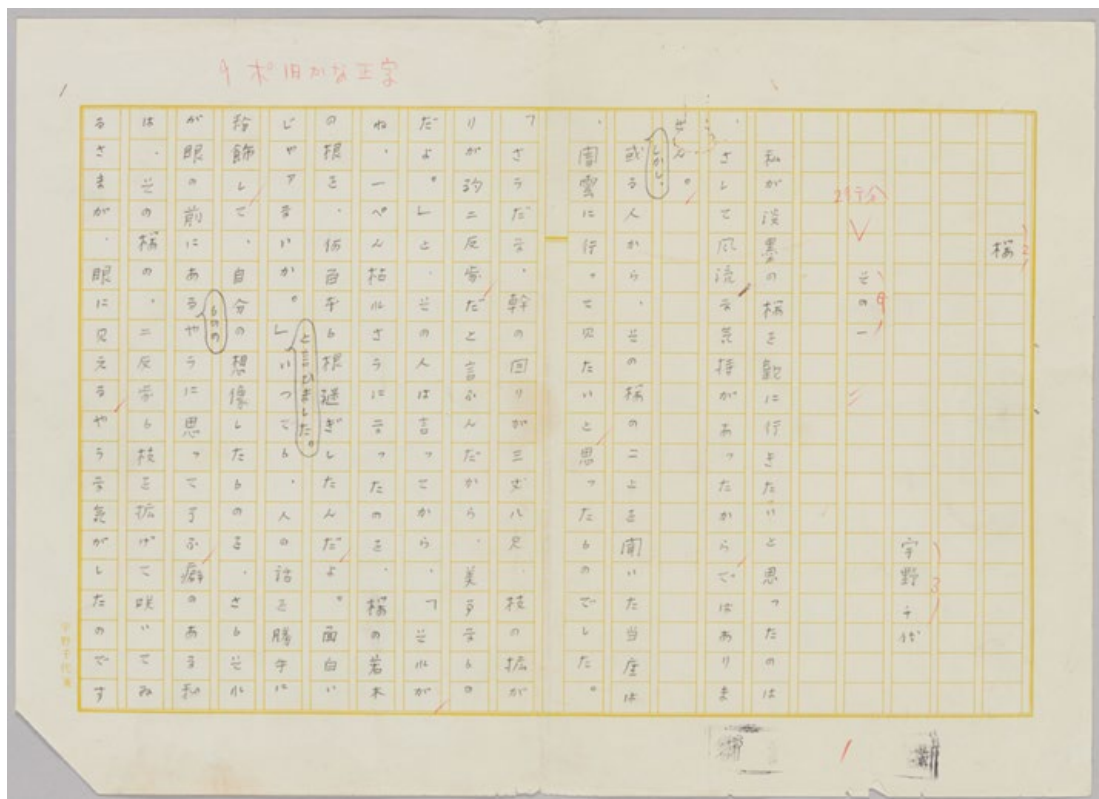
世田谷文学館が所蔵する宇野千代資料は戦後すぐに発表された小説から最晩年の随筆までに及ぶ膨大な資料群です。今回はその第一弾として、1949年から1953年にかけて発表された小説『おはん』や、宇野千代が愛し保全を訴えた岐阜県・本巣市の「淡墨桜」をはじめとする、桜を描いた小説『薄墨の桜』などの原稿を、高精細画像によって公開します。

専用の原稿用紙「宇野千代箋」に一字一字端正に書かれた宇野千代の原稿は、彼女の作品がいかに周到に準備・推敲された末になったものであるかを示すものです。代表作『おはん』[図2]や『薄墨の桜』[図3]連作の原稿には訂正の跡がほとんどなく、背後に数次にわたるメモや草稿が存在したことを窺わせます。



〔図2〕『おはん』原稿。提出時の直しがほとんどなく、周到に準備されたことを窺わせる。

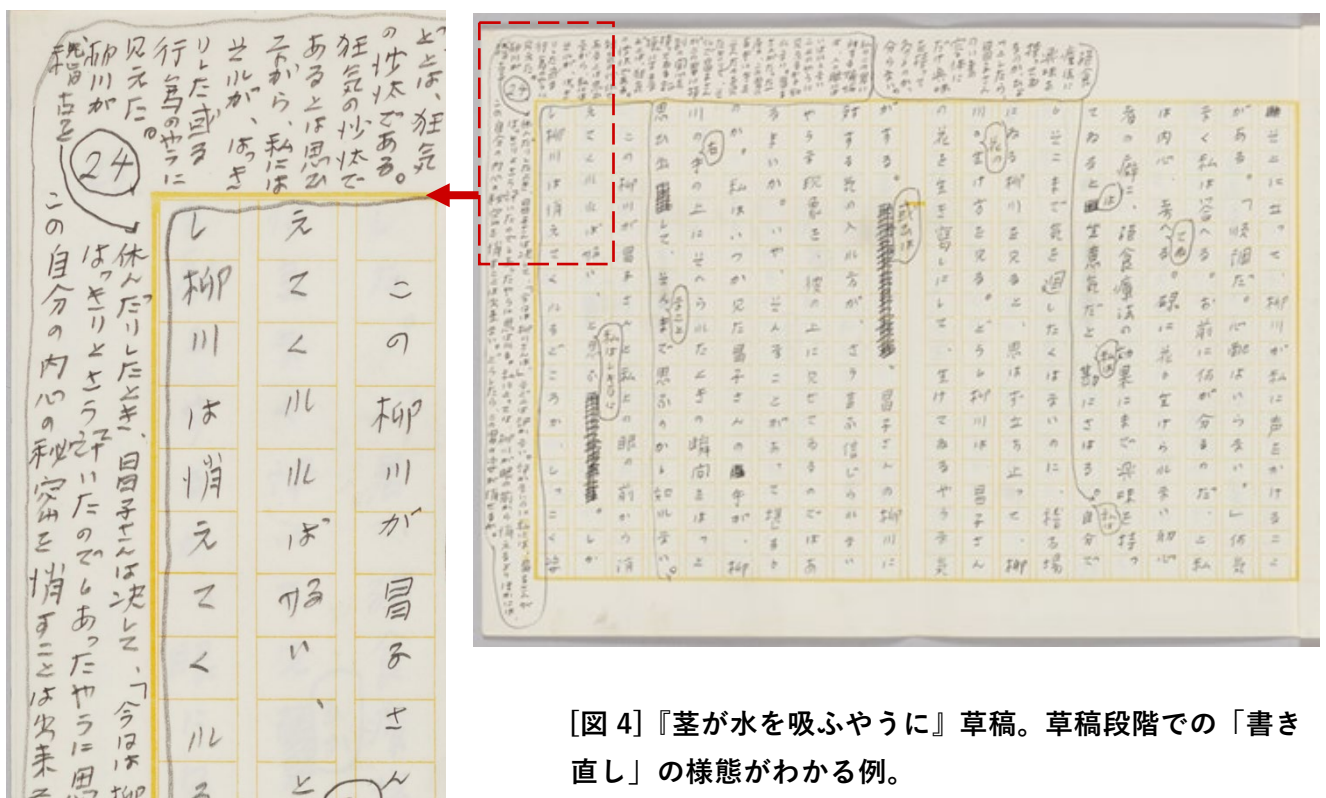
<https://doi.org/10.20730/300140507>



【図3】『桜』（『薄墨の桜』連作の一）原稿。岐阜県・本巣市の「淡墨の桜」を描いた作。

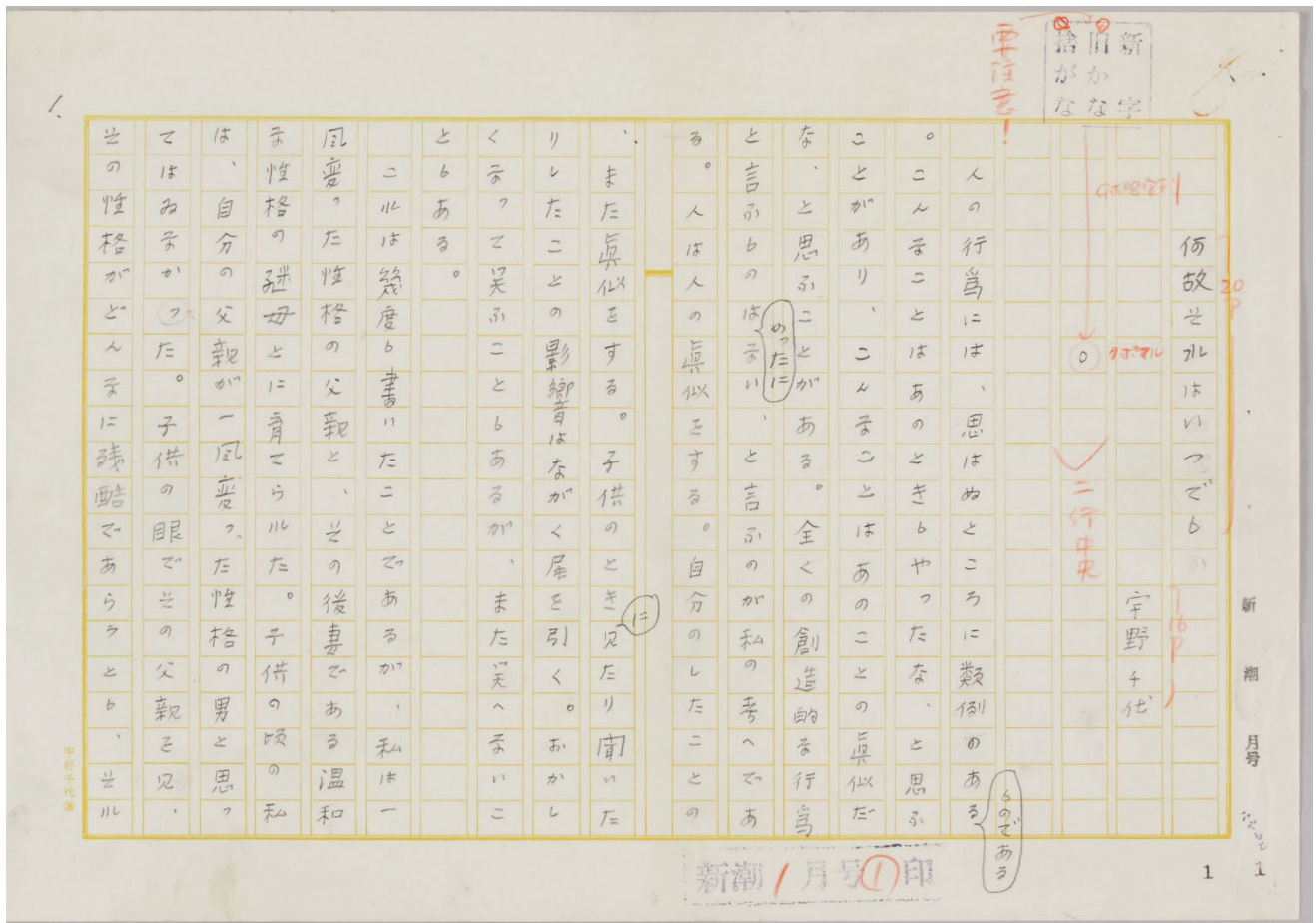
<https://doi.org/10.20730/300140518>

一方、『茎が水を吸ふやうに』草稿【図4】のように辛抱強く書き直しを進めたことがわかる資料もあり、また編集者により「新字／旧かな／捨がな／要注意！」と指定のある『何故それはいつでも』原稿【図5】のように、彼女が文字づかいに細心の注意を払ったことを示す資料もあります。画像公開によって、こうした「創作の現場」を詳細に分析することが可能になりました。



【図4】『茎が水を吸ふやうに』草稿。草稿段階での「書き直し」の様態がわかる例。

<https://doi.org/10.20730/300140494>



[図5]『悪徳もまた2 何故それはいつでも』原稿。「新字／旧かな／捨がな／要注意!」と指定あり。
<https://doi.org/10.20730/300140504>

画像公開は国文研における近代自筆資料収集公開事業の一環であり、すでに公開した以下の資料とあわせて見ることで、近代文学における「自筆資料」の具体的な姿を知ることができます。

かごしま近代文学館所蔵	島尾敏雄特別資料	52 点 (計 1,952 枚)
	梅崎春生自筆資料	3 点 (計 366 枚)
笠岡市教育委員会管理	森田思軒自筆原稿	157 点 (計 1,009 枚)
世田谷文学館所蔵	梅崎春生自筆資料	21 点 (計 1,270 枚)
中原中也記念館所蔵	中原中也自筆資料	502 点 (計 2,317 枚)
二松学舎大学附属図書館寄託	大西巨人「神聖喜劇」自筆原稿	1 点 (計 6,573 枚)
武者小路実篤記念館所蔵	武者小路実篤自筆資料	177 点 (計 3,838 枚)
福岡市立総合図書館 (福岡市文学館) 所蔵	上野英信自筆資料	45 点 (計 2,146 枚)
暮鳥会所蔵 (茨城県立図書館寄託)	山村暮鳥自筆資料	51 点 (計 4,017 枚)
藤村記念郷・藤村記念館所蔵	島崎藤村「夜明け前」自筆原稿	37 点 (計 3,055 枚)

※ほか、株式会社丸善雄松堂との協力により、同社の運営するポータルサイト「J-DAC」上の「オンライン版近代文学作家自筆資料集」と目録データを連携中。

両館の概要



国文学研究資料館は、国内各地の日本文学とその関連資料を大規模に集積し、日本文学をはじめとする様々な分野の研究者の利用に供するとともに、それらに基づく先進的な共同研究を推進する日本文学の基盤的な総合研究機関です。

国文学研究資料館ホームページ

<https://www.nijl.ac.jp/>



世田谷文学館は、世田谷文学館は、1995年に東京23区では初の地域総合文学館として開館しました。主として明治以降の世田谷区にゆかりのある文学と文学者に関する資料を収集し、現在、10万点以上の資料を収蔵しています。

〔関連イベント〕 世田谷文学館コレクション展「没後30年 宇野千代展」

<https://www.artpr.jp/setabun/unochiyo30>

2026年4月18日(土)～2027年3月28日(日)

世田谷文学館ホームページ

<https://www.setabun.or.jp/>

問い合わせ

発表内容について

国文学研究資料館管理部

学術情報課基盤データ企画係

メールアドレス center_db@nijl.ac.jp

取材申し込みについて

国文学研究資料館管理部総務課広報室

メールアドレス jigyou@nijl.ac.jp

電話番号 050-5533-2984

世田谷文学館

電話番号 03-5374-9111

FAX 03-5374-9120

メールの場合はHPのお問い合わせフォーム

よりご連絡ください

HP <https://www.setabun.or.jp/>

※掲載画像について

- ・[図1] [図2] の画像提供については、世田谷文学館までご連絡ください。
- ・[図3] ～ [図5] については、記事等への掲載対象外であり、画像提供はございません。